

医学部薬理学教育における P-Drug 実習の導入

喜多紗斗美, 後藤 雄輔, 堀江 一郎,
藤井 誠, 山下 知宏, 岩本 隆宏

福岡大学医学部薬理学

要旨：P-Drug (Personal Drug) は、医薬品の適正使用を目指して、医師が患者に処方する医薬品を、有効性、安全性、適合性、費用の基準から選択し、エビデンスに基づいて自分の処方集を事前に作成する一連のプロセスを意味する。本来、P-Drug は実務者レベルの概念であるが、近年、P-Drug の考え方を教育プログラムとして、医学部では卒前・卒後の医学教育に、薬学部では臨床薬学教育に活用することが試みられている。福岡大学医学部薬理学講座では、平成 20 年度より、医学部 3 年生の薬理学教育において“薬物治療プロセスを早期に学ぶ目的”で P-Drug 実習を導入している。題材としては、高血圧症、糖尿病などの薬剤選択肢が多様な分野を取り上げている。具体的には、担当教員が P-Drug の導入講義を行った後、約 110 名の学生を 3 名ずつの小グループに分け、各症例課題について P-Drug 実習 (4 コマ：360 分間) を実施する。学生は、各種医薬品情報にアクセスできるコンピューター、治療薬マニュアル、各種治療ガイドラインなどを利用できる環境下で、グループ討論しながら実習を進め、各症例に対する報告書 (処方箋も含む) を完成させる。最後に、グループ毎に作業内容を発表し、学生間で討論する。医学部 3 年生は基礎科目から臨床科目への移行期になるが、この時期に、薬物療法の手順や考え方を P-Drug 実習により学ぶことは大変有意義である。学生のアンケート調査では、多くの学生が本実習の主旨を理解し、その意義を評価していた。

キーワード：P-Drug 実習, 医科薬理学, 問題基盤型学習